

新版教科書でこんな授業をしてみたい

新しい学習指導を考える会

一上「はる」

1 等身大の風景

初めてこの教材を見たときの第一印象は、なんて温かくて、希望に満ちた絵だろう、ということでした。見開きの場面からあふれ出てくる生命力と、淡い水彩ならではのノスタルジックさが入り交じり、自分が小学一年生だったころの思い出までがよみがえってきました。ただ、現行教科書一年の第一教材「あそびにきてね」と比較して、果たして子どもたちはどちらの教材が感情移入しやすいのかと考えると、少々不安でした。「あそびにきてね」は、絵もイラスト調でシンプル。うさぎが、家へ招待するために動物たちに地図を渡すというわかりやすい設定で、ロールプレイもしやすかったからです。新しい教科書のこの絵から、子どもたちはいったいどんな言葉を紡ぎ出すのか、どこまで想像を膨らませることができなのか、予想はつきませんでした。

ところが、黒板いっぱい拡大した絵を提示したとたん、わたしの不安は吹き飛びました。登校中や、朝の教室の風景を見

て、子どもたちはどんどん話をし始めたのです。それは、描かれているものの指摘にとどまらず、子ども同士の会話や、鳥に話しかけている場面にまで発展していききました。「あそびにきてね」のときよりさらに生き生きと話す子どもたちの姿がそこにはあったのです。なぜでしょう。それは、この教材が子どもたちにとってまさに自分たちと等身大の風景を映し出しているからではないでしょうか。入学したての一年生にとっては、毎日が新しい出会いです。そのすがすがしい期待にあふれた自分の生活を教材に重ね合わせることができたからこそ、絵の世界にすっかり入り込んで、次々と言葉を紡ぎ出すことができたのだと思います。

2 この教材で身につけたい力

「はる」は、学校生活に期待と不安を膨らませて入学してきた子どもたちが初めて国語学習と出会う入門期の第一教材です。国語の学習には、ほとんどの子どもが、「たくさん字が書けるようになりたい。」

「自分でお話を読めるようになりたい。」など、強い期待と願いをもっていきます。そこで、挿絵を見て知らせたいことを選び、友達にわかるように話したり、友達の話を興味をもって聞いたり、はっきりした発音で話したりという、国語学習の基礎となる力を楽しく身につけていくことで、国語科へスムーズにいざない、国語学習への喜びをもたせられるような活動にする必要があるでしょう。

3 楽しい国語教室開きにするために

この教材は、絵をもとに知らせたいことを話していくことが学習の中心となることとはもちろんですが、子どもたち自身の登校中の出来事や、学校生活の中で楽しみにしていることなども発表させながら進めていきたいものです。自分の話をしたり友達の話を聞いたりすることで、学習がより身近なものとして受け止められると思います。

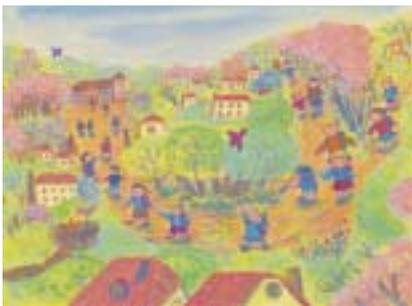
「字を習った。」「勉強するぞ。」と意欲満々の一年生にとって、これはとても知的好奇心をかき立てられるものでしょう。範読するなどの手だてさえあれば十分暗唱できる量です。曲に合わせて歌ったり、簡単な身振りをつけたり、群読したりなど、さまざまな方法で声に出して読む楽しさも味わいたいものです。

明日から学校に来ることが楽しみになるような、お友達とお話することが待ち遠しくたまらなくなるような、そんな授業を子どもたちといっしょに作ることできたらいいなあと思います。

また、本教材のもう一つの大きな特徴は「はる」の詩が載っていることです。



17年度版「こくご」一上「はる」の詩



17年度版「こくご」一上「はる」の詩



17年度版「こくご」一上「はる」の詩



17年度版「こく」「上」「はる」の挿絵



17年度版「こく」「上」「はる」の挿絵

「はる」

1 「学級開き」「授業開き」の指導

入学したての児童は、小学生へのあこがれが実現し、好奇心旺盛、やる気満々で、活力があります。担任がこの児童の意欲を受け止め、大きな学習エネルギーに変換する授業を展開すれば、学習の楽しさを実感し、学校好きの児童を育てることが出来るものと確信します。さらに、生き生きと活気のある学級づくりにもつながるものと思います。そのためにも、学習の基本となる入門期第一教材の授業の役割は大変重要です。ぜひ、児童が、「わたしたちは小学生になったんだ。」「一年組の一員だ。」「これからしっかりと勉強しよう。」「と考える」「学級開き」「授業開き」にしたいと考えます。

また、単に国語科の授業に終わらせず、生活科や学級指導等と関連させ、広い視野

で学習を展開することにより、「学校は楽しいところ」と実感させたいと思います。

2 詩「はる」の音読

新一年生は、満開の桜をはじめ、さまざまな花々の咲き乱れる春爛漫の四月に入ります。蝶や小鳥も飛び交う暖かい春の日を受けながら、児童は登校してきます。そんな状況にぴったりの「はる」の詩を音読する学習は、授業開きに最適です。担任が優しくさわやかに範読し、児童も楽しく音読する学習から授業をスタートさせましょう。

児童が音読に慣れてきたら、動作を入れたり、暗唱したり、曲に合わせて歌ったりと活動を発展させ、朝の会や帰りの会で継続させるのもよいと思います。

3 第一教材「はる」の指導

入学したての児童は、真新しい教科書で早く学習したいとわくわくしています。

第一教材「はる」は、新入生が共感す

る内容の絵が、明るい色合いで描かれています。この教材を活用して、話すこと・聞くことの活動を中心に、次のような学習活動を展開してはどうでしょう。

一 ページに描かれている花の色や名前を發表し合う。生活科などに関連させ、学校の花壇や通学路に咲いている花も含め、春の花の名前を知る。(カードに花や色の名前を書き、板書するとともに、教室内に掲示しておく。花カード・色カードと仲間分けした語彙グループを意識させたい。)

二、三ページの登校途中の絵を見ながら、気がついたことやわかったことを發表し合う。登校している子どもの様子、見える風景・描かれている植物や生き物など、子どもの思いを自由にさせたい。

自分たちが朝、登校したときの様子と比べて、感じたことや思ったことを發表し合う。

四、五ページの教室にあるものを、自分の教室にあるものと比べながら發表し合う。

六、七ページの挿絵を見ながら、教室

までの登校風景について、自分たちの登校の様子を思い浮かべながら發表し合う。

「おはよう」をはっきりと発音し、友達と動作を入れながらあいさつをする。担任には、「おはようございます。」「と敬体であいさつをする。(あいさつ言葉をあいさつカードにし、時や場により変わることを理解させる。)

育てたい力) 数字は、学習活動番号(

春の植物や色についての言葉を理解する。

挿絵や体験から気づいたことやわかったこと、思ったことを相手にわかるように話す。

友達の話聞き、話の内容を理解する。

(基本的な話形や声の大きさ・速さ、話すとき、聞くときの姿勢などを指導する。)

「おはよう」「は、朝のあいさつ言葉であることを理解する。あいさつの言葉は、人と人の心をつなぐ大切な役目があることを理解する。

言葉って、おもしろいな

四下「言葉遊びの世界」

1 本教材のとりえ

本教材「言葉遊びの世界」は、大きく二つの内容で構成されている。一つは、資料をもとにさまざまな言葉遊びを知り、体験し、言葉への関心を深める内容である。もう一つは、その言葉遊びを、資料をまねながら自分たちも作り、発信・交流する内容である。

国語学習としての中心的活動は、時数配分を見るまでもなく、後者にかかわる活動といふことになる。しかし、前半の活動もそのエネルギが後半に大きな影響を与えるという点からみれば、大変に重要な活動である。

前半の活動で大いに楽しみながら言葉への関心を膨らませ、後半の活動に粘り強く取り組ませることが、本教材の要諦と考える。

2 本教材で身につけさせたい力

本教材を通して、特にどのような力の獲得をねらうべきか。もちろん言葉単元である以上、ひたつくるめて「言語感覚を磨く」などと表現することもできるのだが、もう少し具体的に考えたい。

資料 における「いろいろな言葉遊び」の内容は、次のとおりである。

言葉の「音」を利用した遊び
・しゃべれ

・回文

・言葉を一言ずつ行の初めに置いて作った詩言葉の「意味」を手がかりにした遊び
・なぞなぞ遊び

・なぞかけ
・クロスワードパズル

いずれも、一定の約束や条件に合わせて言葉を選び、配列・構成するところにおもしろさがある遊びである。このような遊びの特性を考えた場合、本教材では「条件に合う言葉を適切に選び出し、表現する力」をねらいとして設定することが適当と考える。

楽しみながらも、単に思いついた表現で満足することなく、より適切な表現を見つけてさせることに重点を置き、粘り強く活動に取り組ませたいものである。

3 指導の構想

では、実際の授業をどのように進めるか。

まず、前半の楽しむ活動であるが、ここは紙幅の都合により割愛する。ただし、授業者がそれぞれの遊びの具体例を数多く用意しておき、楽しませると同時に、それぞれの遊びの構造を十分に理解させる必要があることはいうまでもないであろう。その前提に立って後半の活動である。

後半の活動では、自分の取り組んでみたい遊びをいきなり選ぶことをやめ、あえて全員で一つの遊びに取り組むことから始めたい。それは、そこでの活動を通して、よい問題作り、作品作りをするためには、十分言葉を吟味することが大切であることを理解させるから、各自の活動に入りたいと考えるからである。

では、どの遊びを取り上げるべきか。わたしなら、クロスワードパズルを取り上げてみたいと考える。それは、なぜか。

まず、しゃべりなぞなぞ遊びは、児童にとって身近であるがゆえに、容易にできすぎてしまう可能性がある。さらなる工夫を促しても、過去の経験による慣れが、むしろマイナスに働いてしまう可能性が高いと思われる。

一方、なぞかけなどはかなり高度な活動であり、思考を働かせて言語感覚を磨くにはよい活動と思われる。が、高度なだけに、なかなか自分の作品を作ることができない児童も多く現れることが予想される。

その点、クロスワードパズルはほどよい難度であり、そのなかでも児童の力に合わせた変化がもたせやすい。

例えば、マス目の数を増やして挑戦させる。



17年度版 国語 四下「言葉遊びの世界」p.48, 49

「花の名前」など言葉の条件を付けて挑戦させる、漢字によるクロスワードパズルに挑戦させるなど。そして、それらを初級・中級・上級と分類することで、どの児童にも自分に合った難度の問題作りに取り組ませることができると考える。

また、クロスワードパズルのよい点は、問題作りの過程で辞書をたくさん引く必要があることである。「あ」で始まって「ん」で終わる四音の言葉はないかな、というときに辞書が役立つ。パズルを解くヒントの文章を作る際にも必要となる。というように、活用場面が多いのである。

このクロスワードパズルの問題作りに全員で取り組み、そのうえでさらに自分でやってみようという遊びに取り組ませることで、質の高いものが生み出されるのではないかと考えている。

もちろん、より質の高い問題・作品作りには、授業者の適切な声掛けが必要不可欠である。児童の実態に合わせながら、粘り強く作品作り・問題作りに取り組ませることが、言葉の力をつけるうえで鍵と自覚して指導に当たりたい。

言葉って、おもしろいな

六下「わたしたちの言葉」

1 この教材をどうとらえる

本教材は、大きく分けて二つの内容からなる。一つは、わたしたちの言葉のおもしろさを考えさせる内容である。もう一つは、わたしたちの言葉のすばらしさをとらえさせる内容である。それに伴い、教材も二つからなる。「ダレン先生と子どもたちの会話」と資料「言葉の橋」である。

一つ目の教材「ダレン先生と子どもたちの会話」は、アメリカ人のダレン先生と子どもたちとの会話を通して、複数の意味をもつ言葉をはじめ、助詞やあいさつの言葉について考えていくものである。会話のなかで具体的な例を取り上げているので、それを参考にして課題に取り組むという構成になっている。

ここでは、外国人の先生との会話という設定から、あいさつなどの日本語のおもしろさを自然に導いている。また、具体例を取り上げた後に課題を解決していく構成もわかりやすい。その二点から、子どもたちは容易に日本語のおもしろさに気づき、

意欲的に課題へと向かうであろう。

二つ目の教材 資料「言葉の橋」は、一つ目の教材が楽しい場面設定であるのに対して、日本語のすばらしさを詩の解釈から述べている。ここでは、「人々のどのような思いが言葉として伝えられているのか」が書かれている。

例として取り上げられている二つの詩「冬は」と「シャボン玉」は、まさに日本語のすばらしさを表している。どのような心を伝えようとしているのかを考えさせるのに、とても適した詩である。この二つの詩を通して、言葉を橋として思いを伝えるすばらしさをとらえることができるはずである。

2 この教材で主に身につけたい力

日本語のあいさつ言葉に込められた意味や思いについて、友達と話し合う。
(話・聞ウ)

自分自身の言語生活を振り返り、自ら育てた言葉その状況とともに書き留める。(書イ)

助詞の差によってもたらされる文の意

味の差を理解する。(言ウア)

3 こんなふうに指導したい

わたしなら、一つ目の教材「ダレン先生と子どもたちの会話」は、大いに楽しく取り組みたい。ダレン先生と子どもたちの会話を役割読みで読ませる。ダレン先生役の子どもには、外国人役になりきらせてもよい。その後、ダレン先生の疑問について話し合わせる。日本語の不思議さ、難しさに十分に共感させたい。それが十分になされないと、単なる言語事項の学習になってしまう。

続いて、課題に取り組ませる。これも子どもたちなりの説明を尊重するとともに、子どもたちの作った例文をできるだけ発表させたい。日本語の不思議さ、おもしろさ、楽しさを味わわせたい。

そして、わたしなら 資料「言葉の橋」を読む前に、「冬は」と「シャボン玉」の二つの詩を視写させたい。その後、その二つについての初発の感想を話し合わせる。それとともに、二つの詩が何を伝えているのかを話し合わせる。

続いて、資料「言葉の橋」を読む。題名「言葉の橋」が何を表すのかを考えさせる。「言葉は、人の心と心を結ぶ橋のよつなものです。」という一文が表すことを、子どもたちの経験に即して言い換えさせたい。

最後に、六年間の学校生活を振り返らせる。

- ・ 国語の学習や読んだ本のなかで出会った、印象深い言葉
- ・ 友達や先生、家族とかわした、心に残る言葉
- ・ 言えてよかった言葉、言えなかったのに言えなかった言葉
- ・ 大好きな映画や漫画などの、記憶に残っているせりふ

それらを集めて一冊の本にする。
そんな教科書の活動例をせひやってみて、必ずすすべき記念になるはずである。



17年度版 国語「六下」わたしたちの言葉」p.62 63